

私学の魂

江戸川学園取手中・高等学校



茨城県南エリアに中高一貫教育のムーブメントを起こし、「規律ある進学校」に「自ら学ぶ」探究学習を加え、新時代の「心豊かなリーダーの育成」を実現しつつ、2022年入試からは英語を加えた5教科入試へ!

1978（昭和53）年の高校設立から43年を迎え、いまでは茨城県内で屈指の著名な私立中高一貫校となった江戸川学園取手中・高等学校。創立から9年目に中学を開校し、茨城県南エリアでは最初の中高6か年一貫教育校として人気と成果を高めてきました。最寄りの「取手駅」周辺を中心に、土浦・守谷・つくばエリアをはじめ、近接する千葉や埼玉、東京エリアからも広く受験生と入学者を集めています。2019年からは茨城県内の県立高校が中学募集を開始して、いま新たな“中学受験ブーム”が起きている茨城県。そのエリアの私立中高一貫校の先駆的な存在として、今後のさらなる進化が期待される同校の歩みを着任から40数年にわたって支え、生徒の成長を見守ってきた現校長の竹澤賢司先生と、進路指導部長の熊代淳先生、広報ご担当の遠藤実由喜先生に、今回は「Zoom」を使つてのインタビュー取材でお話を伺いました。



校長 竹澤 賢司先生

DATA 1

江戸川学園取手中・高等学校

- 沿革 1978（昭和53）年 江戸川学園取手高等学校開校。
1980（昭和55）年 硬式野球部が創立3年目で夏の甲子園大会に出場
1987（昭和62）年 江戸川学園取手中学校開校。…中高6か年一貫教育校となる。
1993（平成5）年 高等部に医科コース設置
2014（平成26）年 江戸川学園取手小学校開校。…小中高12か年一貫教育校となる
2016（平成28）年 中等部3コース制がスタート。
2017（平成29）年 創立40周年記念式典挙行。
2020（令和2）年 3階建て総合体育館「Sakura Arena（さくらアリーナ）」完成。
2022（令和3）年 中学入試科目に英語を加え、全回の入試を国・算・社・理・英の5科目入試に（日本初）。

校長 竹澤 賢司

所在地 〒302-0025 茨城県取手市西一丁目37番1号
TEL：0297-74-8771（代表）
<http://www.e-t.ed.jp/>

交通 JR常磐線・東京メトロ千代田線「取手駅」西口から徒歩20分。バス10分「江戸川学園」、「中央タウン」行。TX（つくばエクスプレス）「守谷駅」西口からバス20分（バス5便）。同「つくば駅」から（つくばバスセンターより）バス80分。6：50～8：10（学校着予定）

茨城県南部と常磐線沿線のエリアで 江戸川学園取手中高が巻き起こした、 中高一貫教育と中学入試への注目！

2014年から校長を務める竹澤賢司先生は、江戸川学園取手中・高等学校の創立時から着任して今年で43年目を迎え、同校の中高一貫教育校としての歩みを長きにわたって支え、生徒の成長を見守り続けてきた存在です。

「中学を開校した1987（昭和62）年の当時は、常磐線沿線にはまだ茨城県内にも千葉・埼玉県内にも中高一貫校はほとんどなかったと記憶していますが…」という編集部からの質問に対し、竹澤先生は、

「そうでしたね。茨城県南の常磐線沿線エリアでは本校が最初の私立の中高一貫校だったと思います。それまでは近隣エリアの優秀な小学生（中学受験生）は、川を越えて東京まで受験しに行って、合格したらその東京の学校に通うというケースがほとんどでした。ですから中学開校の当初は、東京を中心に隣接する千葉・埼玉県の進学塾にも積極的に足を運んでの広報活動をして、まず“茨城県南部にも私立中高一貫校が誕生した”ということを知ってもらおう努力からスタートしました」と当時を振り返って話してくれました。

ちょうどその1980年代の後半は、中高一貫教育への注目度が高まり、中学受験生が増加の一途を辿った時期でもありました。その時期に、茨城県内と常磐線沿線エリアの新たな中高一貫教育校として江戸川学園取手中高が誕生。県内近隣エリアの私立中高一貫校のリーディングスクールとして、年々人気を高め、その教育の成果にも注目が寄せられるようになりました。それ以前から中学受験が盛んだった東京や神奈川だけでなく、茨城エリアの中学受験熱を高め、多くの小学生の目標となる私立中高一貫校となっていったのです。

「その後、次々とこのエリアに私立中高一貫校が誕生し、やがては千葉県立の併設型中高一貫校も開校したことで、中学受験の市場が広がっていったと思います」と竹澤先生は言います。

そして2020年からは茨城県立の著名な高校が次々と中学募集を開始して、いよいよ来年は県立トップの進学校として人気の土浦第一高、水戸第一高校が中学募集を開始します。

それでも、そうした県立トップ高校が中高一貫校となることは、私学にとっての脅威になると同時に、中高一貫教育に注目し、中学受験をめざす多くの小学生と保護者の意識を喚起し、新たなムーブメントを起すきっかけになると編集部では考えています。

「そうですね。教育の多様化と変化の時代に、県立中高一貫校も含めて、いろいろなタイプの中高一貫教育



OB 新妻耕太氏による『新妻免疫塾～やさしいコロナウイルス解説～』の動画。

<https://data.wingarc.com/k-and-l-immunology-club-25660/amp>

校が生まれ、それぞれの学校が特色ある教育を行っていくことで、この茨城と常磐線エリアの教育はもちろん、日本の教育自体が良くなると思います。このコロナの時代にも、だからこそ世界に通用する本物の教育が求められると思います」と竹澤先生は目を輝かせます。

「現に本校の卒業生にも、コロナの感染対策の研究に関わっている卒業生がいます。

筑波大学から同大学の博士課程でヒューマンバイオロジーの学位を取り、カリフォルニア大学サンフランシスコ校に客員研究員として渡米し、現在はスタンフォード大学の医学科博士研究員をしている新妻耕太くんというOBです。彼は山中伸也教授とも交流があり、同教授のホームページに、彼が作成した「やさしいコロナウイルス」という解説動画がリンクされていますので、関心のある方にはぜひご覧いただきたいと思います。また、長崎の客船の感染対策の現場で中心的に関わった医師も本校の卒業生でした」と竹澤先生。江戸川学園取手中高がめざす世界型人材の育成＝「タフな学力・人間力」を体現し、いま世界の医療現場に貢献している卒業生を、頼もしく感じているご様子でした。

コロナ対策の外出自粛期間中も生徒は、 制服に着替えてオンライン授業を受講。 そこにも江戸川学園取手らしさが…。

ところで今回の「私学の魂」取材は、コロナ感染対策のための緊急事態宣言による外出自粛要請期間中の5月21日に、Zoomミーティングで行いました。

当然、江戸川学園取手中高の在校生も、自宅での学習を続けている期間です。どんな状況なのでしょう？

「本校では毎朝、きちんと制服に着替えてのホームルームからオンライン授業を行っています」と竹澤先生。

「毎朝、制服に着替えてというのも貴校らしく感じますね」という編集部からのコメントに、竹澤先生はこう答えてくれました。

「制服に着替えると、スイッチが入るのですね。制服を着て、ホームルームから授業まで、生徒は規律正しい日常生活のなかで主体的に学習を続けてくれていると思います。体育の授業などでは本校のジャージに着替え、ストレッチなどをしていて、それが良い気分転換になるようですね」

緊急事態宣言の期間中、オンラインを活用して何らかの形で「生徒の学びを止めない」工夫や対応をしてくれた学校に、受験生の保護者の注目が集まっています。

「4月中に、全教科の先生がオンライン授業をできるよう準備をして体制を整えました。そして5月の連休明けからはシラバス通りに授業が行われて、生徒も喜んでオンライン授業に取り組んでいます。」

5月中は教員も約半数が出勤し、半数が在宅で授業の準備やオンライン授業をしています。

「保護者にとっては、毎朝制服に着替えて、時間割通りにオンライン授業を受けていることが、安心感につながるようです。学校でしてきたことを、そのまま自宅できているという認識を持てることが大きいですね。」

また土曜日には学年を決めて、生徒を登校させて、ひとり8分くらいの2者面談をしています。そこで話を聞くと生徒たちの学習の様子がよくわかりますね。

こうしたコロナ禍の状況下でも、「しっかり授業をしている」というのが本校の姿勢です。登校を再開する6月半ばには、当初の予定どおり一学期中間試験も行います」と竹澤先生は、自信を持って答えてくれました。

確かに『毎日しっかり授業をする』というのも、江戸川学園取手中高らしい姿勢だと感じられます。ただし、それをするのは先生方が大変だったと思います。その点を進路指導部長の熊代淳先生に伺いました。

「平常時の生の授業と比べると、かなり授業の準備には時間がかかったりします。ただ、ホームルームも含め、毎日、変わらずに勉強ができていることに、生徒たちからは前向きな、感謝の声がありました。そういう声



令和元年「第9回科学の甲子園茨城県大会」で優勝

を聴くと、こうした生徒がいるから私たちは教員でいられるのだと強く感じました。

ホームルームで生徒の出席を確認しているのですが、そのときに生徒からいろいろなコメントや質問が寄せられます。日々の学習時間なども報告してもらっているのですが、むしろ平常時よりも、一対一で生徒と接することができているかもしれません。

ちなみにこうした生徒とのやり取りは、本校ではMicrosoft teams やクラッシーを使っています」

複数のオンラインツールを使って、それぞれの特性を生かして、生徒とのやり取りがスムーズにできるよう工夫しているということなのでしょう。

コロナ以前から在籍していた在校生はオンライン授業にもスムーズに対応できたと思うのですが、中高の新入生である1年生はどうだったのでしょうか？

「新中学1年生は、4月6日(月)に登校して入学式を行い、4月8日(水)から授業がスタートの予定でしたが、緊急事態宣言が発出されてからは、課題を送ったり、授業の動画配信をしたりして、一日7時間は学習に取り組めるようにしました。」

さらに新入生にもタブレットを連休明けに配布できましたので、そこからはオンライン授業を行っています。高校1年生は大半が中学からの内進生ですので、外部から高校に入学してきた少数の生徒への対応をしっかりとすれば、とくに問題はありませんでした」と竹澤先生。江戸川学園取手中高の「毎日しっかり授業をする」基本姿勢は、ここでも揺らぐことはなかったようです。

NEW アフタースクールと探究学習で、好きなことを主体的に学び、やがてはより良い社会をつくることに貢献する

こうして中高一貫教育の草創期から常磐線沿線エリアの中学受験生にとっての目標となった江戸川学園取手中・高等学校は、創立以来「心豊かなリーダーの育成」を教育理念に掲げ、「誠実・謙虚・努力」の校訓のもと、「規律ある進学校」という教育方針を保ち続けてきました。「心力」「学力」「体力」の「三位一体」の教育ということも、変わらぬ理念として謳われています。

1980年代後半という、ちょうどバブル景気のピークに向かい、自由を好む空気が広がっている時代に、あえて古風ともいえる「誠実・謙虚・努力」という校訓を掲げ、「規律ある進学校」としてスタートした同校は、私学ならではの明確な校風とカラーを生み育て、堅固な努力主義を保ちつつ、一方では現代的な制服を採用するなどして、茨城県内と常磐線沿線エリアの私

立中高一貫教育に新たなムーブメントを起こしました。

「創立期には、確かにいまより努力主義の色が濃かったかもしれません。ただ、創立理念や校訓、教育方針は変わることはなくても、現在までの進化の過程で、数年前から生徒の主体性や自主性を尊重し、“自ら学ぶ”姿勢を育てていく方向性を強めています」と竹澤先生は言います。

「その象徴的な例が、大テーマを『SDGs』に、“世界に挑め!”というキャッチフレーズで、21世紀型スキルの獲得をめざす『NEW 江戸取 探究学習』であり、生徒が主体的に学び、伸びようとする芽を存分に伸ばすことができるよう、魅力的なアフタースクールの講座を150以上用意して行う『NEW 江戸取 アフタースクール』です」と竹澤先生。

中学開校から33年に至る過程で、一方では大学合格～進学実績を着実に伸ばしつつ、もう一方では次世代に求められる力を育てる教育プログラムを新規に導入し、その手応えと生徒の伸びやかな成長をバネに、着々と進化しつつあるようです。

「生徒たちの主体性や自主性を伸ばさないといけないという強い思いが私自身にあり、カナダの修学旅行などに何度も同行して感じていたのは、日本の生徒は受け身になりがちということでした。それではいけないと思い、生徒が主体的に学んでいけるような雰囲気づくりをしたいと考え、導入したのが『アフタースクール』でした。生徒が主体的に積極的に選んで受講していけるよう、アクティビティー系や体験系の講座など多様な講座を設けることで、さまざまな講座を選択して学んでいけるようにしたのです」

「それまでも、いろいろな体験ができるよう教科以外の講座を増やしてきたのですが、それが現在の『アフタースクール』の形に進化しています」と熊代先生。

「人はもともと嫌いなことよりも好きなことに全力を



本物の注射器を使って、採血の体験や本物の針と糸を使って縫合の体験をします。

傾ける傾向がありますので、自由に選べる形にしたことが良かったと思います。また、本校卒業生の弁護士や企業で働くOB・OGがいろいろな講座に協力してくれています。本校には医科コースもありますので、様々な医療体験ができるよう進化しています。

多様な講座があるため、終業式ではいろいろな分野の表彰をしないとイケませんので、とても時間がかかります（笑）」と竹澤先生は笑顔で話してくれました。

「また、『探究学習』では、国連グローバルゴールズで定めた17の『持続可能な開発目標』のガイダンスを行い、中学ではグループ学習から入り、高校では個人学習に入り、最終的には高3の前期に、小論文をまとめてプレゼンをするという6年間の流れになっています。それと『国際教育』ですね。これらが一体となって、生徒の主体的な学びにつながっています」と竹澤先生。

「SDGsがテーマになったのは一昨年からです。今後は大学入試も変わっていきますし、はじめに大学入試ありきの学びでは本末転倒だと思いますので、むしろ生徒たちが主体的に取り組んでくれることが教師にも分かり、その結果、大学受験でも好結果につながってきたように思います。高3生は、小論文のまとめとプレゼンをやり遂げてから、集中して大学受験に向かっていきます」と熊代先生も、手応えを語ってくれました。

現在の中1や小6の生徒が大学や大学院を卒業して社会に出るのが、ちょうど2030年頃で、その年が「SDGs」の目標達成年度と国連で示されています。その意味では、「自分たちが今後生きていく社会」をより良いものにするために各自が何かできることをしていこうという、いまの中高生世代の生徒の感覚や志向は、それ以前とはだいぶ変わってきているように思えます。

「そう思います。いまの生徒は、自分だけが競争に勝ちたいとか、良い企業に入って稼ぎたいとか、そういう価値観やモチベーションを持つことは少ないように



進路指導部長の熊代 淳(くましる あつし) 先生

思います。むしろ自分のためというよりは、社会のために何ができるか、貢献できるかということを考える生徒が増えているように思います」と熊代先生は言います。

高校医科コースの設置～小学校の開校など、変化の節目や学園環境の進化をバネに、2016年から中等部に3コース制を導入。

竹澤先生が校長に着任してからの数年間で、小学校の設立や中等部3コース制のスタートなど、江戸川学園取手がさらに進化する節目を迎えました。

「高校の医科コースは1993（平成5）年に設置していますので、たとえば2016（平成28）年から公立中高一貫校になった千葉県立東葛飾高等学校に医歯薬コースが設置された2014（平成26）年よりかなり前でした。

続いて変化の節目になったのは、2014（平成26）年に江戸川学園取手小学校が開校し、学園が小中高12か年一貫教育校となったことです。

さらに2016（平成28）年には、中等部に「東大ジュニアコース」、「医科ジュニアコース」、「難関大ジュニアコース」の3コース制を導入し、高校の各コースにつながる一貫教育の体制を強化しました」と竹澤先生は、この間の矢継ぎ早の学校改革について話してくれました。

「茨城エリアではこの時期、私立小学校への期待と注目度が高まっていたので、そのニーズに応えるべく小学校を開校したことで、学園の認知度と求心力が高まりました。とくに英語教育で高い成果を上げることにつながったと思います。それが中等部・高等部の教育展開にも良い影響を及ぼしています」と竹澤先生。

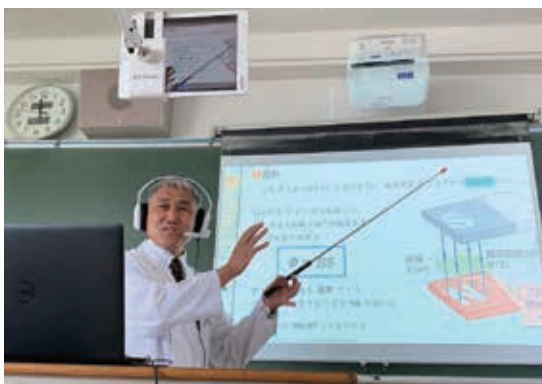
そして、教育の内容やスタイルが進化するのと同時に、学園の教育環境も、さらに充実しています。

「この2020年4月には、総合体育館である『Sakura Arena（さくらアリーナ）』が完成し、生徒が学校に戻ってくるのを待たばかりです」と竹澤先生。

取材時にはまだ緊急事態宣言は解除されていませんでしたので、この新たな施設の主役である生徒たちがここで躍動する姿は見られませんでした。6月以降に学校に戻ってきた在校生の喜ぶ姿が想像できます。

「さくらアリーナは、全館冷暖房完備です。熱中症対策も十分です。また全校生徒でパブリックビューイングができる大型スクリーンの設備もありますので、東京オリンピック・パラリンピックの開催時には、生徒全員で見ることが企画していました。これは1年延期になりましたが…」と竹澤先生は楽しみにしています。

「規律ある進学校」として、ある種の厳しさも大切に



オンライン授業は様々な工夫がなされ中身の濃い内容になっています。電子黒板を活用したオンライン授業。

しつつ、新しい課題に取り組む必要があることについては、教育のスタイルを時代に合わせて変えていく柔軟性も併せ持つ江戸川学園取手中・高等学校。

「私立学校には建学の理念がありますので、誰でもいらっしゃいということではないと思うのです。その理念に賛同してもらえる家庭から、自ら学ぶ意思を持った受験生に来てほしいと思います。

また、厳しさについても、自分に厳しくなければ、他人に優しくできません。そうした面も含めて、本校が『心の教育』を一貫して大事にしてきたことは今後も変わることはありません。しかし教育の手法として変えていった方が良く、新しく取り入れていくべきことは、今後もさらに進化させていきたいと思っています」と、竹澤先生は同校の未来を見据えています。

確かに、医学の世界や国連で働こうという夢を持ったとすると、そこが厳しい世界であることも事実です。

「去年から米カリフォルニア大学のサンディエゴ校にメディカル体験に行っているのですが、価値観や倫理観も日本とは違うのです。そういう最先端の医療の経験をすることで、『世界に出るためには、タフな学力がないと通用しない』ということは生徒たちも教師も十分わかっています」と竹澤先生。

つまり同校がめざす「世界型人材の育成」とは、そうした世界で求められる「タフな学力」「タフな人間力」を育てることなのでしょう。

江戸川取手のPBL（課題解決型学習）の一環として行われている「SDGsスタディーツアー in カンボジア・ベトナム」のプログラムなどは、かなり強烈な原体験を生徒にもたらすものと思われます。

「このツアーは私たち教員でもすごいと思います。知っているのと体験することは違いますので…。ガツンとする強烈な体験をすることで、生徒が本気で学習に取り組むようになります。そうした体験のなかで気

づきを得たり、現地の人とコミュニケーションを取って共感するためにも、やはり根底には人間力がないと通用しないと思います。ここでも『タフな人間力』がキーワードになってきます」と竹澤先生は強調します。

中等部でも 2022（令和3）年入試から、英語を加えた5科目入試に移行。 全国の私立中に先駆けて大胆な改革を実施！

2020年度から2022年度にかけて、茨城県立高校10校が次々に中高一貫校になるという状況の変化も踏まえて、「私学としての江戸川学園取手ならではの教育の魅力とアドバンテージ」をお聞きすると、

「それは大いにあります。県立中高一貫校は良い学校とはいえ、中学募集の定員が40名～80名と非常に少ないのです。しかし本校は、小学校からの内進生も含めて、中学では1学年300名規模の学校です。系列の小学校では英語教育も小1から受けていますし、『7つの習慣』も学んでいます。こうした一貫教育は、やはり私学ならではのものです。

たとえば本校の中1生の英語力を見ても、高い英語の力を持っている生徒が非常に多いのです。

こうした流れができていくことも含めて、同じ茨城県内に公立中高一貫校が何校できようとも、本校ならではの特色ある教育の価値はびくともしなないと思っています。そして中学1学年の定員が多いことは、多様性も含めて大きな武器でもあると思います」と竹澤先生は、長年携わってきた同校の教育への自負を力強く語ってくれました。

最後に、来春2021年以降の中学入試についてお尋ねすると、大きなニュースが伝えられました。

「来年の2021年入試はコロナ禍による受験生に配慮した入試を検討しています。また、再来年の（現在の小5受験生が挑む）2022年入試は、全員に英語を



SDGs スタディーツアー in カンボジア・ベトナムでの孤児院訪問の様子。



カリフォルニア大学サンディエゴ校での医療研修を受けた研究員の先生方と終了証を持って記念写真。

課して、全回の入試で5教科入試を行いたいと考えています。ただし、最初からハードルを高くしても受験生に負担ですので、あくまで小学校での学習プラスアルファ程度の英語力を求める、易しい英語から課していきたいと考えています」

編集部が知る限り、中学受験生全員に「英語を課す」形で「国・算・社・理・英」の5科目で入試を実施することは、全国の私立中学校でも初の試みです。

「小学校から英語教育を重視してきた本学園が、中等部～高等部へとつながる12年間一貫教育の体制のなかで、中学入試に英語を加えるという決断に違和感はありませんでした」と竹澤先生はいいます。

しかし、県内の私立中で最も高い人気と入試の難易度を誇る同校が、すべての入試で英語を課すということは、受験生にとっても進学塾にとっても大きなニュースです。現在の小学校5年生以下の中学受験生と保護者にとっては、新たな対応が必要になります。

「東大や医学部、他の難関大学をめざすにも、今後はより高い英語の力が求められます。海外大学をめざすなら、なおさら必要です。先ほどご紹介した『探究学習』プログラムや『アフタースクール』の講座で、さらには海外で取り組む本校独自のPBL（課題解決型学習）『SDGsスタディーツアー in カンボジア・ベトナム』などの体験学習でも、英語の力は必須です。

こうした一貫教育のストーリーのなかで、高い英語力を育てていくためにも、小学校で英語が教科化された今春2020年度の小学校5年生のときから、中学入試にも英語を課すことは自然な流れでもありました」と竹澤先生は、江戸川学園取手中学校の今後の入試の変化の背景を語ってくれました。

再来年2022年入試では日本初の「英語必須」入試に踏み切る江戸川学園取手中学校。それが次のステップへのブレイクスルーになる可能性は大きいはずです。